

「今日は水曜日でないですよ」すっかりこの《青いカバ》の常連になってしまった。この《青いカバ》は、駒込の日本医師会館近くにある古本屋の店名である。偶数月の第一水曜日に開催されるある委員会に出席するたびに、この書店に立ち寄ることが習慣化し、楽しみにようになってきた。今回は、ある研修会に出席するための上京であり、いつもの水曜日ではないと指摘されたのだった。「この前はお父さんしかいなくて」と私が言うと、「お父さ

はある思いをもって店名にしたのだろう。《青いカバ》の作製理由の真偽はともかく、私は以前から、カバに多大な関心を持っていて、娘たちが小さい頃、よく円山動物園に連れて行って、必ずといっていいほど、カバの所に立ち寄ったものである。特に目立った存在ではなく、少なくとも、円山動物園の来館者の増加に大きく貢献しているとは決して思えなかったが、動物園の片隅の淀んだ池に身を沈め、口をあらんかぎり大きく広げている姿を見るにつけ、世の中の

## 『カバ』との共生物語

情報広報部 橋本 洋一

んじゃありません。このお店に勤めているんです。将来は古本屋をやりたいと思っっています」このお店の娘さんと私が勝手に思い込んでいたのに苦笑してしまっただが、神田神保町の古本屋には、時間があれば必ず立ち寄るほど古本屋まわりは好きだったので、またひとつお店が増えることは大歓迎であった。

《青いカバ》はメトロポリタン美術館の非公式マスコットで、古代エジプト中王国時代に王様の副葬品として作製されたものらしく、店主

進歩や競争とま  
 ったく縁のない  
 世界に生きてい  
 る『カバ』にな  
 るとなく親近感  
 を抱いたもので  
 ある。『カバ』は  
 草食動物であり、  
 鋭くない眼つき、  
 しょぼしょぼし

た小さな眼やぼつりとしたメタボなお腹、体型のわりに短い脚など口を全開しない時の外観からは、2、3歳の幼児くらいの知能があると  
 言われている犬や猫ほどに知能があるように見えないが、きわめて温厚で愛すべき動物と思われた。しかし、大きな口を上下の角度を最大限150度に全開している姿は、威嚇行為であり、肉食動物にみられる犬歯が発達し、稀に肉  
 食を食らうらしく、実態とはまったく違ったイメージを勝手に思い描いていたのかもしれない。

現在、地球上に生存している『カバ』は【カバ】と【コビトカバ】の2種類のみで、動物園や個人所有で飼っている場合を除いて、アフリカ大陸にのみ生息しているらしい。過去には他のカバも生存していたらしいが、気候変動の影響で絶滅してしまったようだ。  
 【コビトカバ】が準主役で登場する作品がある。小川洋子氏の『ミーナの行進』だ。虚弱体質のミーナは【コビトカバ】に乗って、毎日小学校に通う。カバ通学しているミーナを羨望の気持ちを持って読み込んだ記憶がよみがえった。【コビトカバ】が亡くなり、ミーナは悲嘆にくれて、死んでしまうのではと心の底から心配したが、ミーナは【コビトカバ】の死を見事乗り越えて、卓越したスーパーレディに変身し有能な会社の経営者に成長していく。【コビトカバ】のパワーを受け継いだように思えるほどだ。【コビトカバ】の力を借りて通学する前半のファンタジックな場面からは想定できないリズムミカルでテンポの速い後半の展開に圧倒されつつ、この作品は幕を閉じる。

【カバ】と【コビトカバ】は共に、絶滅危惧種に指定されているが、『カバ』が近くの川で水浴びをして、そのまわりに落ちたフンにより土地の生態系が活性化され、農作物や川に住む生物に有益さをもたらす。『カバ』との共生は、地球の環境変動や生物多様性の維持に対して責任のある我々人類にとって貴重なひとつのモデルになるかもしれない。